

特集

ソ連の出方を読む

米ソ首脳会談前夜の
緊急
インタビュー

ゴルバチョフ ソ連は変わるのか

人事、行革、外交と精力的な新書記
長に決め手はあるのか——巷にあふ
れる「ゴルバチョフ・フィーバー」
を諫め、病む超大国の実像に迫る！

澤 さわ
へ聞き手・構成

英 ひで
武 たけ

(サンケイ新聞編集委員)

まさもり
昌盛
させ
佐瀬
(防衛大学校教授)



にしき
新関
さんや
欽哉
(日本国際問題研究所理事
長兼所長・元駐ソ大使)



ラインハ・
ドウリフテ
(イギリス国際問題研究所研究員)



ひろし
寛
かとう
加藤
(慶応義塾大学教授)



お
嶺雄
なかじま
中嶋
(東京外国語大学教授)



石油の倍々の値上がりでウハウハのソ連、その差が七〇年代はあったんだけれども、八〇年代でようやくそのアメリカの挫折が消えて、本来の力のあるアメリカに戻っている。

一方ソ連は石油の値が下がって収入もなくなつて、穀類は買わなくちゃならん。ですからレーガン・ゴルバチョフ対決といつても、バックグラウンドはまるで違っているわけです。ゴルバチョフの唯一の武器といえば、レーガンよりも二十歳若いということですね。

佐瀬 S D Iの問題に戻りますけれども、ジュネーブ交渉はソ連としては継続していくほうが得だ。ソ連として本来一番得な選択というのは、S D Iの研究は規制できない、それではI N Fと戦略核兵器の削減交渉をやりましょう、と。これをやってくるのが、どう考えたって本当はソ連にとって一番いいはずなんですよ。

その際にむしろアメリカは、下手すると外交的守勢に立たされるかもしれない。外交的守勢に立たされないうまでも、両方がいつても互譲を迫られるわけで、アメリカにとつても互譲というのは必ずしも望ましくないかもしれない。その際にはソ連が、本当の意味

で外交攻勢に立てるだろう。それ以外のものはソ連の宣伝攻勢だと思えますけれどもね。



中嶋 嶺雄

中ソ関係回復のシナリオ

ゆるやかな同盟関係の回復

——最近ソ連に行かれたということですが。

中嶋 八月二十七日から九月四日まで、ソ連科学アカデミーの社会科学学術情報研究所の招聘による学術交流プログラムです。旧知の同研究所のクザジャン副所長やソ連中国学会の大御所でソ中友好協会副主席でもあるチフヴィンスキー外交学院院长、それにゴルバチョフ人事の一環として就任したチタレンコ極東研究所長ら約六十人ぐらいの学者と会いました。学術情報研究所と極東研究所で講演もしました。

ゴルバチョフ体制については、ソ連でもか

なりつつこんで本音を聞いてみると、日本と同様に大きく分けて二つの見方があると思います。スタイルは非常に斬新で、ニユールックだけれども、ソ連社会は当分変化しないのではないかと。ソ連のシステムそのものが、そう簡単には動くはずはないだろうという見方が一つ。

他の一つは、彼はソ連の改革を思い切つてやるだろうという見方だと思ふんです。私は、どちらかというの後者の見方ですが、それはゴルバチョフ自身が、ソ連はもうあつちこつちのパイプが行き詰つていて、このままではだんだんソ連がだめになつていくという、ある種の危機感みたいのをもっているニユリーダーだという印象を受けたからです。かなり大幅な改革を志向するだろうし、せざるを得ないだろうと見るわけです。最近の一連の急ピッチな人事異動はその第一着手でしょう。ソ連ではアンドロポフ時代の評価がいま大変高く、一方ではすでに「非ブレジネフ化」が進んでいます。ゴルバチョフ体制の利点は、リーダーが若く、十分な持ち時間があるということでしょう。

中ソ関係も動いてきています。九月三日、

日本のミズーリ号艦上での降伏四十周年を祝う中国大使館のパーティにアリエフ政治局長兼第一副首相が出席して中ソ双方で祝賀の宴を張っていました。こんなことは一九六〇年代初頭の中ソ対立以来、はじめてだと思ふんです。そういうふうには、対内的にも対外的にもいまのソ連が、動こうとしている。

もう一つのポイント、そのアリエフがいつのあいだ、北朝鮮に行つたことです。ソ朝関係もかなりよくなつてゐる。最近の中国は、日中友好とか中国の「西側化」といった日本の期待にもかかわらず、再び社会主義のより原則的立場に回復しつつあり、レーガン政権のSDI開発、朝鮮半島の将来構想、ソ連のSS20の極東配備、将来のシベリア開発、そしてGNP一%枠問題や例の中曽根首相の靖国神社参拝問題にみられる「日本軍国主義」批判など、要するに世界戦略とか、国際政治の基本に触れるような問題になつてくると、社会主義国の原則的な立場をとるといふ姿勢をはっきりさせてきていることが決定的に重要です。そういう意味では、すでに平壤と北京とモスクワの「ゆるやかな同盟関係」が回復しているという印象を強く受けま

した。

——そうしますと、このあいだの北朝鮮の第二次大戦戦勝四十周年祝賀に、中国側代表が行きませんでしたか、あれはどう解釈したらしいですか。

中嶋 それはそんなにたいした意味はもたないんじゃないかと思ふんです。中朝関係は金日成、金正日継承問題のバーゲンみたいなかたちもあつて、もうかなり太い関係になつて基盤が固まっています。この点ではなんといつても中朝関係は「唇齒輔車」の関係だから、そういうことがいままさら気にならなくなくなつてきたんじゃないか。つまり中ソ関係が悪いつき、あるいは平壤が北京とモスクワのあいだを渡りあるかなければいけないといふときは、そういうことはデリケートな問題だつたけれども、いまのように全体に「ゆるやかな同盟関係」が回復してきましたと、金日成も金正日も気がねせずモスクワ、北京へ行かれるし、なんといつても中朝はもつとも親密な同志だといふかたちになつてきていますからね。少なくとも北東アジアなり、アジア情勢に関する基本問題では、彼らは同じ立場に立ちつつあります。これは非常に大きい変化

で、ここを注意しておかないと、日中友好外交だけで安心していたら、必ずしつべ返しをくらいます。

中ソ関係がこれほどよくなつてきているという状況のもとでは、党・国家という区別がだんだん不必要になるような状況で、なしくずし的に中ソ関係がよくなつて、気がついてみたら、ここまで中ソが改善していたという状況になりつつある。少なくとも七〇年代の終りに比べると、明らかに大違いでしょう。中国はあれほどソ連を批判し、ソ連の脅威を強調していたでしょう。日本の防衛力増強はソ連と対決するためにも大いに結構だといひ、日本はその中国の主張に誘われて「覇権」条項入りの日中平和友好条約を結んだのに、肝心の中国はくるつと變つて、もうほとんどソ連の脅威をいわなくなつた。そのうえ、最近では「日本軍国主義」批判や中国への日本の「経済侵略」批判のデモさえ北京で起つています。ソ連はこうした中国の変化を大歓迎で喜んでいきます。

——それはもっぱら中国側の変化にとらえていいでしょうね。

中嶋 そうですね。中国側の変化が根本的

だと思えます。中国側が変化しなかつたら、いまの中ソ関係改善は絶対にはない。

——もともとソ連のほうは、毛沢東が死んだあとは、一貫して改善のためにありとあらゆる努力をやってきた。

中嶋 そうですね。いくらソ連がタマを投げても、中国側が毛沢東主義なり、反ソ戦略をとっている限り、中ソ和解はあり得なかつたけれども、中国は国内政治を根本的に転換し、毛沢東の政策を否定したわけでしよう。その否定が、七八年の三中全会以来、じわじわと出てきて、その結果がいまになって表面化してきている。

——鄧小平のプラグマティズムが大ききなフアクターになっていると私は見ているんです。つまりイデオロギーとかなんとかというよりは、算盤勘定のほうが先に立っているんじゃないかという感じがするんですが。

中嶋 鄧小平はかなりプラグマティストあるいはリフォーミストといつてもいいと思います。そのプラグマティズムは、中国では覆らないでしょうね。だから流れは逆流することはないけれど、この先、右へ流れてゆくのか、左へ流れてゆくのか、という蛇行はくり

返さざるを得ない。

再び喧嘩する気力はない

——中国は、長い歴史のなかから見ると、社会主義の経験は短いもので、結局、開放経済が彼らの体質に合っている。逆にロシアはあまり商売ができない民族です。ですから、『文学新聞』も、中国のいまの経済政策に関心を寄せているけれども、不安感、警戒心も同時にもっている。ソ連がそれを真似る気は毛頭ないわけです。というのは、真似られない。民族そのものの考え方、行動の仕方が違っているということはあるわけでしょう。そんなことで、いまのソ連自身は、中国に対して違和感が当然あるのでは？

中嶋 私はそうは見ません。ソ連自身は、いまの中国の経済政策を、大いに評価しています。今回私が会ったソ連の学者の大部分は、中国の最近の経済改革をかなりバラ色に見ている、この点は私の見方と根本的に違うので、大いにソ連の学者と論争してきました。もつとも一抹の不安があるだけに、私の意見を聞きかたかったようで、現時点で私が招かれたのは、そのためだと思います。

——もつと別な理由があるとは考えられませんか。つまり中ソ関係をよくするという大きな目的で批判を差し控える。これ以上中国と喧嘩のタネをつくりたくないとか。

中嶋 それにしては中国の変化は、かなり本質的です。しかも、中国がここまでやっているのをソ連は、私の感じではむしろ逆に期待しているくらいで、ただそれがあまり西側に行ってもらうと困る。陳雲あたりの影響力で、少しもどつてくれればいいと。中国は「開放経済」が必ずしもうまくゆかず、いまあちこちで矛盾が出てきているので、東側へもどらざるを得ないでしょう。六月八日の『人民日報』の社説を見ても明らかのように、よりオーソドックスな社会主義を求めてきている。

そもそもソ連も中国も、共産党の官僚的独裁下にある社会主義国です。二十一世紀に中国の一人当りのGNPが、二千ドルか三千ドルになれば、中国自身がいいよ本格的に「西側化」し始めると思いますが、それはもつと先のことで、まだ一人当りGNPが二百五十ドルとか三百ドルという状況のなかでは、彼らは社会主義路線を捨てることはでき

ない。

社会主義社会として中ソは同じ共通性に見
覚めつつある。この変化はまちがいないと思
います。たとえばアメリカからどんだん軍事
協力を得て中国社会そのものがアメリカ化す
る、西側の一環になる、NATOの一環みたい
になるということは、絶対できないですね。

——その変化はわかります。しかし、中国
がこのぐらい大きな振幅で変化するというこ
とは、逆にまた中ソが将来、決定的に喧嘩を
するという可能性もあると思います。

中嶋 それだけのバイタリティは、社会主
義の世界にはもうないんじゃないですか。

——いま共通の社会主義とおっしゃいまし
たが、それよりもっと根っここのころの、
ロシア民族と中国人という社会主義でくれ
ない部分、もっと深刻な違和感。

中嶋 それはまったくそうですね。彼らだ
ってまさにイデオロギーとストラテジーで結
びついているし、同じ社会主義という、非人間
的なシステムで結びついているんであって、
本当にロシア人と中国人が仲のいい民族であ
るといふことはない。私はこれまでそのこと
を、むしろ人一倍強調してきたほうです。

同時に中ソ間には、少なくとも社会主義と
いうシステムなり、世界戦略という目的で見
る限り、西側とのあいだに大きな違いがあ
る。そこを忘れて、中国がこのまま「西側
化」する、日本がいくら防衛力を増強しても、
中国はソ連がこわいから、いま日本の資本や
技術が欲しいから、日中友好万々歳で日本に
賛成してくれるという期待があったでしょ
う。それは中国についての見方が根本的にま
ちがっている。この点で最近の中国の「中曾
根批判」は、中国に甘い幻想を抱いていたわ
が国の政・財・官界にいい薬になったと思
います。



ラインハテ・
ドウリフテ

ソ連外交の優先順位とは

東アジア戦略は軍事力で

——ゴルバチョフ新政権の外交からお聞き
したい。その重点はどこにあり、どんな優先

順位によっているでしょうか。

ドウリフテ 新たにゴルバチョフ政権が発
足したからといって、外交があれこれ変わる
とは思いません。第一に、ゴルバチョフ路線は
ソ連外務省の官僚主義を継承し、それを変え
なかつたこと。第二に、軍指導部がなお影響
を保っていること。第三に、国際環境は
(ソ連外交の)いかなる根本的变化に対しても、
あまり具合がよくないこと。反対に、ア
メリカ外交、とりわけレーガン大統領によつ
て展開される政策路線は、ゴルバチョフの
「平和攻勢」と限定していると思います。

ゴルバチョフ政権のスタート当時、彼はあ
らゆるものを変えうる新しい人物として評価
されました。しかし、これは中身と包装を混
同している面が多分にあつたようですね。ま
ず、ゴルバチョフが動かかしうる条件というも
のを見なければなりません。そして、その条
件は変つてはいないのです。ソ連外交の優先
順位ということになれば、ソ連指導者にとつ
て、いつの時でも、もちろんソ連とアメリカ
の関係です。それに劣らず重要なのは、難題
が山積している東欧ブロック諸国との関係で
すね。そして恐らく、ソ連は第三世界諸国へ

加藤 そうなんです。だから、自由化を大幅に導入しない限り、この行革は結局、中途半端で終るか、あるいは行き詰りにならざるを得ないということです。



澤 英武

取材後記―「虚像」の正体

三月、ソ連共産党書記長に就任したミハイル・ゴルバチョフに対する関心と期待は、ソ連国内でも、国外でも大きい。

国内では、ブレジネフ、アンドロポフ、チエルネンコと老いて病弱の書記長のタライ回しから、ようやく五十四歳の若い書記長、ゴルバチョフにバトン・タッチが行われたこと。行き詰った経済建て直しに、エネルギーシユな指導者を必要としていること。かくして、ゴルバチョフは国民から救世主のように仰ぎみられている。

九月、訪ソした中嶋氏は、そうしたソビエト国民の期待を、肌で感じとってきた。

三月のチエルネンコ葬儀外交で、ゴルバチョフ新書記長と会談した西側指導者たちも、ゴルバチョフの有能さと、人間的魅力を、おしなべて好意的に評価している。九月に行われたゴルバチョフ書記長と米誌『タイム』とのインタビュー記事は世界の注目を集めた。十一月のレーガン大統領とゴルバチョフ書記長の会談は、今年最大の政治イベントとなるだろう。

「ゴルバチョフ現象」が巻き起っている背景に、平和を願うナイーブな、善意の人たちの顔がみえる。七九年末のソ連軍によるアフガニスタン侵攻以来、悪化の一途をたどってきた米ソ両超大国の関係に、これら善意の人たちは心を痛めてきた。そして、ゴルバチョフに、平和への期待を寄せるのである。

しかし、ソ連はアフガニスタンで六年間も戦い続けている。ソ連が第二次世界大戦を戦った期間より二年も長い。そのソ連の新指導者に平和を期待するのは理屈に合わないのだが、前例はある。

ラインラント進駐から始めて、オーストリア併合、ズデーテン地方併合に進むヒトラーの帝国主義路線に立ちはだかることもせず、

目先の平和のためにヒトラーに迎合したのが、善意の欧州市民、いわゆる平和主義者たちだった。平和主義者たちは、ヒトラーの平和の口約束にすがり、ヒトラーの虚像を、進んで見ようとした。いまの「ゴルバチョフ現象」には、五十年前のヒトラーの影が見え隠れしている。

秘密主義の厚いカーテン越しに、ゴルバチョフの虚像を暴くことは容易ではない。このため、五人の専門家に、それぞれ異なった方向からカーテンを透視して、ゴルバチョフの実像を取り出し、その背景を探ろうとしたのが、この企画の狙いだった。

新関氏はゴルバチョフ外交の基盤を分析、政治局集団指導原理からして、グロムイコ棚上げによっても、ソ連外交路線が変ることはない、との見方を示し、ゴルバチョフ外交への過大評価を戒めた。その例証として、ゴルバチョフ書記長演説では、内政面での欠陥の指摘、反省が驚くほど率直なのに、外交については失敗を認めるような発言はまったく行われていないことをあげている。

したがって、米ソ首脳会談でも、ゴルバチョフ書記長はソビエト外交の正当性の主張を

譲ることはないだろう。ましてや、十年か、それ以上先に、ようやく実現するかどうか、といわれるレーガンのSDI阻止のために、ゴルバチョフが現実の妥協を図る気づかいはない、というのが新閣内の分析だ。

ソ連側はレーガン大統領に、「戦争屋」のレッテルを張り、一方、ゴルバチョフを熱烈な平和の使徒、として宣伝攻勢をかけるだろう。その場合、ソ連の武器は西側の開かれた世論、善意の平和主義者たちである。なぜなら、これら平和運動家たちは、自由世界の議会や指導者に圧力をかけることができる半面、ソ連国民やソ連指導部に影響力を行使することが、体制上不可能だからだ。

佐瀬氏はソ連離れの傾向を強めている東欧諸国とソ連との関係に注目、この問題が、実は米ソ関係以上に、ソ連にとって深刻なのだ、と指摘する。東欧を支配するのに使ってきた石油供給が、もはや東欧の要求するだけ送れなくなったこと、ソ連国民の生活水準がワルシャワ条約機構内で最低であること、ゴルバチョフの対東欧高压姿勢に対する反発など、ブロック内の不協和音は、高まりこそすれ、減る見通しはない。

中嶋氏は中ソ接近が党関係にまで進む、ソ連と中国は共產主義国家として、共通の基盤をもっていることを忘れてはならない、と警告している。中国を引き込んで、ソ連と対抗しよう、といった米国や日本の考え方はきわめて危険、という。中ソ関係はたしかに予想外の改善ぶりだが、中嶋氏の主張にはかならずしも賛成でない学者も多い。中ソ両国民の民族的対立感情がブレーキになる、というものだ。中嶋氏は、中国がソ連との交渉であげた「三つの障害」は実は形式的なもので、それほどの障害とはならない、との見方をとっている。

ドゥリフテ氏は別の見方に立っている。中越国境の緊張は中国にとって負担であり、ソ連は中国の力をそぐため、ベトナム問題が片づかないことを望んでいる、というのだ。ドイツ人であるドゥリフテ氏は、北方領土問題を日本の与野党が内政問題化している、として苦言を呈した。東ドイツの千七百万人の同胞をソ連の人質に取り込まれた西ドイツ国民の苦悩が、ドゥリフテ氏の発言に込められている。

加藤氏は日本の行革と比較しながら、

「ゴルバチョフ改革」が絶望的であることを指摘した。民営化が行われない経済改革は必然的に恐怖政治を招く、ゴルバチョフはスターリン型の恐怖政治を行うだろう、と大胆に予言している。

九月六日、ソ連最大の産油地、チュメニを視察したゴルバチョフは、チュメニが採油計画のノルマを達成しなかったことを厳しく叱り、「簡単にいくらでも石油がとれる時期が終ろうとしていることは、いま初めて明らかになったわけではない。回収強化法に移行し、もっと困難な地区に進出し、層圧がもっと低い鉱床や、開発条件が複雑な鉱床に移るべきである」ということは、前からわかっていたのだ」と八ツ当りしている。

すでに石油工業相は更迭されており、加藤氏が指摘するように、クビ切りゴルバチョフの高压政治スタイルが明瞭に現われている。これまでのところ、ゴルバチョフは欠陥の指摘は率直だが、抜本的改善の処方箋を出すことはほとんどしていない。

対外政策では、ゴルバチョフがもつキャラクターは、テレビ時代にうつつけのものである。事実、昨年十二月の英国訪問では、ス

タイルのいい夫人同伴ということもあって、ロンドンの話題をさらった。サッチャー首相でさえ「気に入った。彼とならビジネスができる」といったほどだ。

ところが、そのサッチャー女史、九月には英国からソ連の外交官や特派員など二十五人を追放してしまった。「スパイ活動」が追放理由である。頭にきたソ連政府が、報復措置として、モスクワから二十五人の英国人を追放すると、英側はさらに六人のソ連人を国外退去させた。たとえ、ゴルバチョフを気に入ったとしても、それとこれとは別。サッチャー女史の神経の太さを示すものだ。

九月十七日、記者会見を行なったレーガン大統領は、米ソ首脳会談で、S D I を取引材料とせず、その研究、実験、開発については

一切、交渉するつもりはない、と声明した。ゴルバチョフがムードで勝負しようとしても、歯が立ちそうにない。レーガン大統領の強硬姿勢は、ソ連の内政、とりわけ経済事情の悪化と、改革の方途がほとんどない、という弱みを突くものであり、容赦のない力の外交の厳しさが示されている。

脚光を浴びるゴルバチョフ政権に対し、日本の外交はどうあるべきか。長い外交経験から、新関氏は、ソ連がハイテク技術の導入など、日本の経済力を利用しようと図ることは明白であり、対ソ・ポジションは日本に有利なのだから、その優位性を生かすことをすすめている。

訪日したデミチエフ文化相に託した中曽根首相あてのゴルバチョフ親書、訪ソした石橋

社会党委員長との会見でゴルバチョフ書記長が示した対日関心など、いずれも第十二次五年計画に向けて、日本の経済協力を誘いながら、日ソ関係改善ムードを日本で高めようとする意図が汲みとれる。

しかし、その一方で「中曽根軍拡路線」「日本の軍国主義復活」といった、共産主義者特有のえげつない対日批判が繰り返されている。「シエワルナゼ外相の訪日を要請するのは当然だが、そのためのおみやげを考える必要はまったくない」と新関氏は強調する。ソ連提案はこれから手を代え、品を代え行われるだろうが、「容器にだまされるな、内容物だけを吟味せよ」——これが日本の対ソ外交へ向けての、五人の専門家の一致した忠告だった。

人はどの時点で「死」と判定されるのか？

見えないうちの死

中島みち

生体が死体に移行する「臨死」をめぐって医学界が揺れる現在、問題の実態を克明にルポした ●1200円

経済戦士を支える妻たちの「戦争」の実情

妻たちの海外駐在

ヒロコ・ムトー

国際経済の修羅場を男だけが戦う時代は去った。彼らの陰で妻たちは何を体験し、考えているか ●1100円

文藝春秋